

### 第三章 入れ替わり

王子は宮殿の門へ行きました。

「すぐに宮殿の門を開けろ」と王子は命じました。

兵士は門を開け、エドワードは外へ出ました。

兵士の一人がエドワードの頭を殴りました。

「王様の兵士に向かって命令を下すな！」

エドワードは地面に倒れ込み、「私はエドワード王子だ、ウェールズ公だぞ」と言いました。

「そうか、それじゃあ俺はイングランド王だ！」とその兵士は笑って言いました。

「そのことでお前は牢屋に行くことになり得るぞ」とエドワードは怒って言いました。

彼の顔は赤くなっていました。

群衆は大声で笑い、「やつは気が狂ってる！」と言いました。

エドワードは怒って道を歩いて行きました。

エドワードは川のそばで遊ぶことを忘れ、ロンドンの街路を歩きました。

市街を歩くのはこれが初めてでした。

エドワードはすぐに道に迷い、疲れ果てました。

靴を履いていなかったため、彼の足はとても痛み、空腹だったためおなかが痛みました。

「私は宮殿に戻らねばならぬ」とエドワードは思いました。

エドワードは人々を止め、「ウェストミンスター宮殿への行き方を教えてくれ」と言いました。

エドワードは王子だったので、決して「どうか」と言いませんでした。

彼を笑う者もいれば、怒る者もいました、エドワードが礼儀正しくなかったからです。

しかし誰もエドワードを助けませんでした。

「これはひどい」と王子は思いました。

「私は空腹で寒い、そして今夜どこで寝たらよいのかも分からぬ。トムの家はプディングレーンの近くだ。きっとトムのお母さんとお姉さんたちが私を助けてくれるだろう」

エドワードは暗く汚い街路を、長いこと歩きました。

そこら中で嫌な臭いがしました。

そして雨が降り始め、冷え込んでいました。

エドワードは惨めでした。

すると突然、エドワードは自分の腕の周りに大きくて重い手を感じました。

「こんな時間に外で何をしてるんだ、トム・キャンティ？」と大きな男は言いました。

「お前の一日の仕事で得た金はどこだ？」

「痛い！ 痛いぞ」とエドワードは叫びました。

「お前は彼のお父さんか？」

「彼のお父さんだと？ 俺はお前の父親だ、ばかなやつめ」とジョン・キャンティはエドワードを殴りながら言いました。

「やめろ！ やめるのだ！」とエドワードは叫びました。

「私はエドワードだ、ウェールズ公だぞ。お前の息子はウェストミンスター宮殿にいる。彼は私の服を

着て、私は彼の服を着ている。われわれは入れ替わったのだ。遊びだったのだ。私を宮殿へ連れて行け」  
ジョン・キャンティは少年を冷ややかな目で見ると、「お前は狂ってる！ 狂ってるぞ！」と言いました。  
ジョン・キャンティはエドワードの腕をつかみ、道を引っ張って行きました。

「お前は俺と家に帰るんだよ、明日の朝、お前は早く仕事を始められるな、それで家に金を持ってくるんだ」

宮殿ではトムが一人きりで王子の部屋にいました。

トムは壁にかかっている大きな鏡で自分を眺め、新しい服が気に入りました。

トムは自分の周りがある、あらゆる美しい品々を眺めました。

国王、女王、王子や王女たちの絵、素晴らしい椅子やテーブル、美しいコップやカップ、そして果物のたくさんのった大きなお皿。

トムは王子の剣を触り、しばらくの間それで遊びました。

トムは王子の部屋にいて幸せでした、そしてこの新しい遊びをするのが気に入っていました。

しかし1時間後にはトムはそれに飽き、そして心配し始めました。

「本当の王子さまはどこにいるんだろう？」とトムは思いました。

「どうして王子さまは戻ってないんだ？ 俺は王子さまを探さないといけないぞ」

トムが大きなドアを開けると、4人の従者が見えました。

彼らはトムにお辞儀をしました。

「わあ！」とトムは叫び、急いでドアを閉めました。

「何とおかしなことだ！」と一人の従者が言いました。

「王子さまはきっとご病気なのだろう」

「王子さまの姉上方かレディー・ジェーン嬢をお呼びしよう」と二人目の従者が言いました。

優しい顔をした、美しく若い女性がドアを開けました。

それはレディー・ジェーン・グレイでした。

トムはびくびくしてひざまずきました。

「どうか俺のことを救ってください、心優しいお嬢さま」とトムは言いました。

「俺はエドワード王子じゃないんです。俺の名前はトム・キャンティで、俺はこじきなんです。エドワード王子と俺は服を取り換えました。王子さまは俺の汚くて古い服を着て、俺は王子さまの美しい服を着てるんです。俺が自分の服を取り戻せるよう、どうか王子さまを見つけてください」

「おや、まあ、あなたは病気だわ、エドワード」とレディー・ジェーンは言いました。

「私と一緒に来てくださいな、あなたのお父上があなたに会いたがっているわ」

「俺の父さんだって？ ジョン・キャンティがここにいるんですか？」とトムは尋ねました。

レディー・ジェーンは答えませんでした。

「王様はとても具合が悪いのです」とレディー・ジェーンは悲しそうに言いました。

トムは彼女の後について国王の寝室へ行きました。

ヘンリー王は床に就いていて、顔は青ざめていました。

「あなたのご子息です、陛下」とレディー・ジェーンが言いました。

国王は目を開け、トムにほほ笑みました。

「どうしたのだ、エドワードよ？ 父に話してみよ」

「あなたが王様なのですか？」とトムは大きくて、太った男を見て尋ねました。

「もちろん私が国王だ。お前は自分の父親が分からぬか？」

トムは頭を下げました。

「王様、俺はあなたの息子じゃないんです。俺は王子じゃないんです。俺は貧しいトムなんです...」

「こんなたわ言はよせ！」とヘンリー王は言いました。

「お前は王子であり、私が死んだときには国王になるのだぞ。さあもう行って今夜のうたげの前に休んでおくのだ。そこには多くの重要な男たちがいるのだぞ」

トムとレディー・ジェーンは王子の部屋へ戻って行きました。

少しすると、ハートフォード卿がヘンリー王に会いに行きました。

ハートフォード卿は背が低く太った、鼻の高い男でした。

彼は国王の第一卿でした。

「ハートフォード卿よ」と国王は言いました、「私はひどく具合が悪いが、働き続けねばならぬ。私は多くの書類を読み、署名する必要があるのだ。国璽（グレートシール）はどこにある？」

「王様は二日前にそれをエドワード王子にお渡しになりました」とハートフォード卿は言いました。

「取りに行って参ります」

ハートフォード卿は国璽を持たずに戻ってきて、心配していました。

「陛下」と彼は言いました。

「王子さまはそれがどこにあるか、またそれが何であるかも覚えておられません」

「思い出せぬのか？ では王子は本当に病気なのだな。国璽は非常に大切なものだ。王子が良くなるまで待つとしよう」

その午後1時にトムは昼食を取りました。

トムは黄金の家具が備わった王家の食堂を見て驚きました。

トムが食べる間、トムのそばには数人の召使いが立っていました。

その午後、かわいそうなトムは多くの間違いをしましたが、召使いたちはトムが病気だと思っていたため誰も笑いませんでした。

トムは指を使って食べ、口で音を立てました。

そしてトムは、大変な興味を持ってナプキンを眺めました。

「このすてきなナプキンを持って行ってください。俺はそれを汚したくないんです」

それからトムはたくさんのナッツを取り、自分のポケットに入れました。

食事の終わりには、召使いがフィンガーボールを持ってきました。

しかしトムはその中で指を洗いませんでした。

トムはそのボールから飲んだのです！